

に譬へてよみ賜へるなり、千鳥は、濱磯にむねと在る鳥なればなり。されば、此歌に依て、彼白智
になり、彼鳥、千鳥なる故に如此よみ給へるには非ず、彼白智鳥は、何れの鳥ぞと心得るは非
まれ、此はたゞそを千鳥に譬へたるなり、よくせずはまざれぬべし。

〔萬葉集三〕歌 柿本朝臣人麻呂歌一首
淡海乃海、夕浪千鳥汝鳴者、情毛思努爾古所念

長屋王故鄉歌一首
吾背子我古家乃里之、明日香庭乳鳥鳴成島待不得而、

〔萬葉集十九〕十二日○天平勝賣侍於内裏聞千鳥喧作歌一首
河渚爾母雪波布禮々之宮之裏智杼利鳴良之爲牟等已呂奈美

〔拾遺和歌集四〕題玄らす

おもひかねいもがりゆけば冬の夜の川かせさむみちどりなくなり、

紀友則

貫之

タざればさほの川原の河霧にともまどはせる千どりなく也

〔枕草子三〕鳥は

川ちどりは、友まどはすらんこそ、

〔十六夜日記〕廿日○申 鳴海の渴を過るに、玄ほひのほどなれば、さはりなくひがたを行おりしも
濱千鳥いとおほくさき立て行もしるべがほなる心ちして、

濱千鳥なきてぞさそふ世中にあると、めんとはおもはざりしを

〔常山紀談〕太田左衛門持資は上杉宣政の長臣也。○申 宣政下總の廳南に軍を出す時、山涯の海
邊を通るに、山上より弩を射かけられんや、又潮満たらんやはかりがたしとてあやぶみける、折
ふし夜半の事なり、持資いざわれ見來らんとて馬を馳出し、やがて歸りて、潮は干たりといふ、い